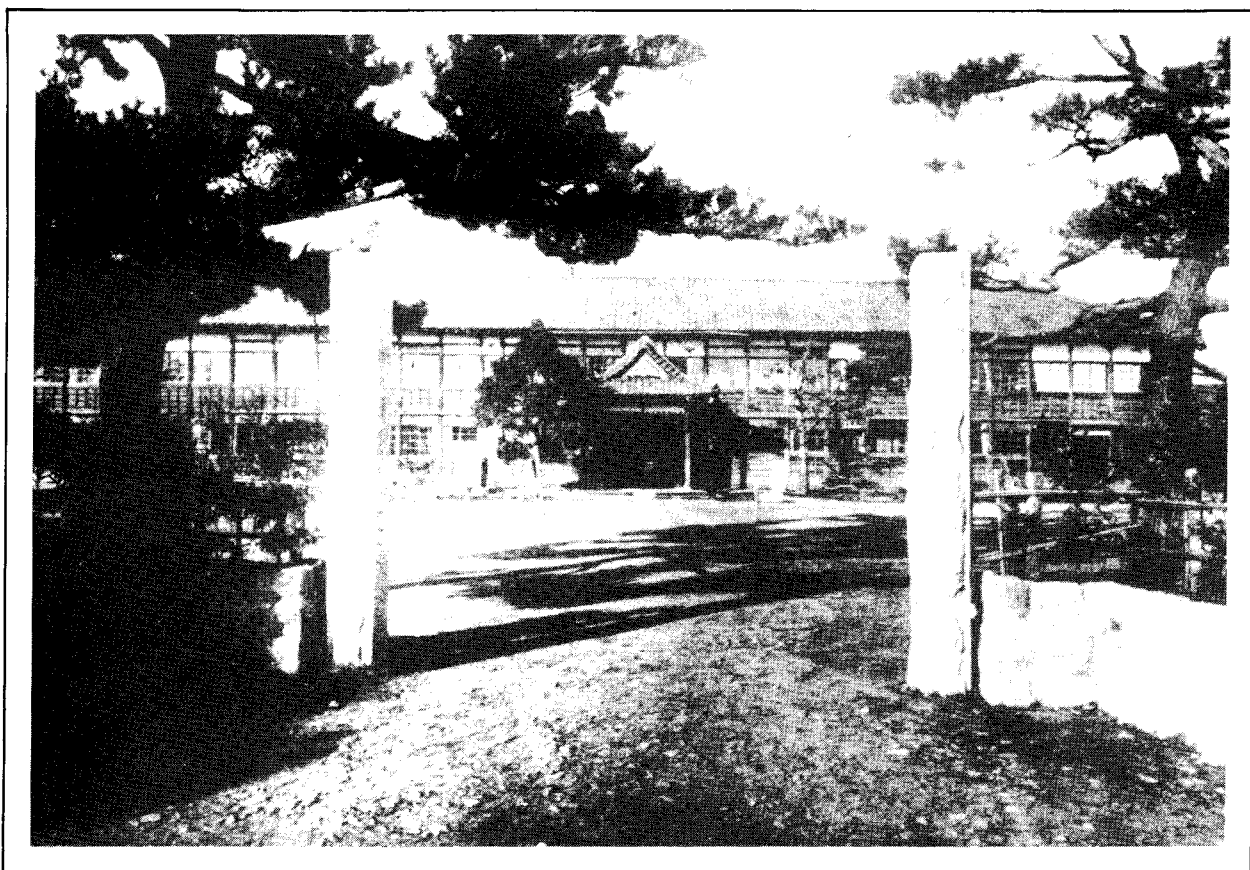


臥龍が丘は緑なり

松高同窓会東京支部会報

昭和63年度支部大会号

63. 6. 11



昭和63年度支部大会号目次

63年大会プログラム	1
支部長あいさつ	佐伯 益一…2
入学式での所感	校長 法性 昇…3
ありがとうございました	4
赤山のこと	亀 嶋 謙…5
きりん山の詩	伊 藤 勇 五…6
幻の女学校によせて	熊 倉 芳 枝…7
思い出の写真集	8
お便りの中から	10
蒲原鉄道ものがたり	高 地 覚…12
釘貫紋の由来と堀直政	佐 藤 久…14
新潟県県立高等学校名	15
消息、校歌	16
応援歌、広告	17



表 紙

旧村松高等女学校校舎（正門）

大正10年5月、村松実科高等女学校として開校、翌11年町立村松高等女学校創立、昭和22年の学制改革により、23年第26回を最後とし、町立女子高校となる。翌24年新制村松高等学校と合併して今日に至っているが、この間の卒業生は1,185名を数える。写真は昭和初期のもので明治20年以來の建物であったが昭和21年5月の村松大火で焼失した。現在は町役場がある。

往時はこの校門の前を数多の松城健児が熱き想いを胸に秘めながら通りすぎていった事であろう。

昭和63年度東京支部大会プログラム

昭和63年 6 月 11 日 (土) 午後 3 時 30 分
於 ホテル高輪

		場内司会 伊藤 勇五 (中33)	
開 会 挨 拶		司会 八木又一郎 (高 7)	15:30
		大橋 貞夫 (高10)	
		深見 洋子 (高 7)	
経 過 報 告		中村 倉吉 (中22)	
支 部 長 挨 拶		佐伯 益一 (中27)	
来 賓 挨 拶	 同窓会長 (村松町長)	茂野 敏郎 (中17)	
来 賓 挨 拶	 学 校 長	法性 昇	16:00
関係職員紹介並挨拶	 本部同窓会事務局	板垣 忠 (高 1)	
		関谷 正中 (高 5)	
懇親会開会挨拶		亀嶋 謙 (中22)	
乾 杯		最 年 長 者	16:07
歓 談 ・ 会 食			
抽 選 会		佐久間英輔 (高 6)	
		堀 直昭 (高 8)	
		大橋 貞夫 (高10)	
余 興		有 志	
手 締 め		支 部 長	
万 歳 三 唱		同窓会長	
閉 会 挨 拶		司 会	

大会運営委員は支部幹事全員

会報第四号に寄せて



東京支部長 佐伯 益一

日の経つのは早いもので、昨年6月に支部会報“臥竜が丘は緑なり”を創刊してから、丁度1年、このたび第4号をお届けすることが出来ました。創刊以来いろいろと資料や、写真を提供して下さいの方々、編集、発送に協力を頂いた方々等、多くの人に厚く御礼を申し上げます。と同時に又その反響の大きいのにも驚いております。会報を一つの媒介として今まで知らなかった同窓の方からお便りや、電話を頂いたりし、まるで百年の知己の様に話がはずみ、コミュニケーションが図られ、同窓の輪が段々と広がってゆくことは、自画自讃ではないが、やっぱり会報を発行して、良かったな、と感慨を深くしております。

実は、この会報を発刊する時、一回や二回は何かなるだろう、そのあと原稿の集りや、経費の問題等で困るのではないかと随分と考え、大分躊躇したのでありますが、役員各位の熱意に押され発行に踏みきった結果、今、立派な成果を挙げつゝある事を喜び合いたいと思います。

然しながらとり分け大きな推進力であった吉田松二郎先輩を病で失ったことは呉々も残念な事ではありますが彼の原動力を受け継ぎ、会報の永続を図り、諸計画の実践を押し進め常に申している“同窓に喜ばれる同窓会”を一日も早く確立することが彼の意志に応える道であると云えるであらう。

幸いに最近母校本部でも新会報“松城”が発刊されました。誠に時宜を得たと申し上げたいのですが、むしろ遅きに過ぎたのではないかと考えております。内容も編

集も立派であり、仲々見ごたえがあります。先づはお祝いを申し上げます。今後はお互い競合するわけですが、常に連絡をとり合い、豊富な記事を取り扱い、過去・現在・未来と同窓史を形成してゆかねばと考えております。

会報第3号までは、仮題“臥竜が丘は緑なり”としてありましたが、この前の役員会で何時までも仮題でもあるまいとの事で、今回より仮題の二文字を取ることにして正式に“臥竜が丘は緑なり”が発足することとなりました。皆さんの会報です。末長く活用して頂くと共に可愛がって頂きたいと思ひます。

寄せられた原稿の中にも過ぎた青春を懐しみ、現状を思い、大いなる前進を希む真情が切々として現れているのをみても、この会報が如何に大きな役割りを果しているかを、窺われます。

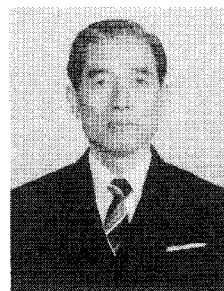
そのためにも会報の役割りを100%発揮するよう、支部事務局内に会報編集委員会を設置する事がきまり、併せて企画、組織の両委員会の設置もきまりました。東京支部は今後、これらの委員会を中心として様々な計画が打ち出されてゆくことと期待しております。

とりとめのない文章になりましたがどうぞ意のある処をおくみとり下さい。

臥竜が丘は常に緑です。

只々前進あるのみです。

入学式での所感



校長 法 性 昇

学校への道筋の家々の庭は、木が多く、入学式の頃は、白い梅は満開で、香りをたゞよわせ、赤い寒椿は咲き誇り、黄のれんぎょうは輝き、新入学生を祝い、暖かく迎えてくれます。古い赤煉瓦の門柱や、校庭の数多くの大きな松は、常に生徒・職員に語りかけています。今は、校庭の桜は美しく、盛りです。

この様な立派な環境で学べる生徒・職員は幸せです。

4月8日の入学式で、呼名されたら、返事をして、起立するよう教えられているのですが、返事が壇上まで聞えず、表情も締らない者がいました。

再び登壇し、話し始めるに従い、全ての生徒が姿勢を正し、視線がずっと合い、瞳が輝いて来、真剣勝負の気迫を感じました。この新鮮な美しさに、呼名の際に、一部の生徒に対し持った気持を恥じ、心の底より喜びが湧き出て、強い使命を感じました。

この美しい、素直な、意欲的な生徒は、式に参列された全ての保護者・来賓・職員に、大きな喜びと、使命感を与えたと思います。言葉はぎこちなかったと思いますが、生徒を称えずにおられませんでした。

このように立派な生徒と、共に学べる喜びを大切に、生徒一人ひとりの能力を、発揮させ、伸ばし、大きな夢・目標の実現に一步一步近づけて行きたいと思います。

生徒として、本校で学ぶ3年間は、極めて重大です。

職員として本校に20年・30年勤めても、その長さにおいて、生徒として学ぶ3年間に及ばないと思います。

或る日の会話です。「あなたは、『私は本校に〇〇年間勤めているのだ。云々。』と言うけど、あなたが、今年どれだけのことをするか、今学期どれだけのことをするかが問題でしょう。」

「1時間、1時間の授業を大切にすることが重大ですよ。」

初心を忘れず、生徒を大切に、長期・中期の展望に基づき、一日一日を大切に、誠実に努めたいと念願しています。私の心の母校・村松高校に忠実に、皆様方に恥じないようにいたします。

村松高校同窓会東京支部の益々の発展をお祈りいたします。

母校本年度の新入生は301名

昭和63年度の入学試験による入学許可の生徒数は、普通科、259名、被服科、42名の計301名で、入学式は4月8日(金)午後1時より、母校講堂で保護者立合いのもと、厳粛に行われた。

尚、本年度離着任の職員は下記の通りで、入学式当日午前、母校講堂で紹介された。

新任職員紹介(校長)

板垣 忠	教諭(村上高校から)	渡辺 貴	教諭(津南高校から)	斎藤 久子	講師
江口 昇	教諭(五泉高校から)	阿部 広美	教諭(中条工業高校から)	弦巻 道子	主任(五泉
吉岡 明子	教諭(加茂高校から)	山田 聡	教諭(新採用)		高校から)
石本 敏朗	教諭(安田高校から)	柳沢 亜紀	教諭(新採用)	川瀬 喜一	用務員
今野 昭一	教諭(西新発田高校から)	高橋美和子	講師(		
岩田 昭博	教諭(埼玉県越谷高校から)	鈴木 由美	講師(		

離任職員紹介（校長）

渡辺 一郎	教諭（退職）	阿部 修	教諭（退職）
斎藤慶二郎	教諭（退職）	山崎かおる	教諭（新発田商業高校へ）
渡辺 雅之	教諭（新潟東工業高校へ）	大森 基樹	講師（新潟市立松浜中学校へ）
加藤 敦子	教諭（安田高校へ）	渡部 英介	講師（小出高校へ）
林 正子	教諭（新津高校へ）	阿部 吉弘	講師（退職）
高橋 知子	教諭（水原高校へ）	稲毛 裕子	司書（新発田農業高校へ）
上野 順治	教諭（糸魚川高校へ）	波多 伸江	主事（新津保健所へ）
池田 美昭	教諭（糸魚川高校へ）	大塚与志夫	用務員（退職）

“ありがとうございました”

昭和62年度支部会費納入者氏名（其の2）

〔旧中〕 9名

川瀬五郎, 小田恕哉, 斉藤誠七郎, 安中盛介, 広瀬憲,
中野博, 加藤三代太,

〔特〕 2名

小池喜一, 須佐平助,

〔旧高女〕 1名

一氏愛子

会報第3号に掲載分 計131名

（63年3月末日現在）合計161名

寄付金

小田 恕哉 20,000円

岡部 ユキ 2,000円

昭和63年度会費前納者氏名

〔旧中〕 福原平八郎

〔高校〕 長沢友次郎

〔高校〕 20名

篠川恒夫, 伊藤勤吾, 小林末吉, 瀬倉武志, 長谷川五郎,
阿部龍介, 鈴木ヤヨイ, 山崎輝雄, 羽下信弘, 加藤久子,
田川百合子, 伊藤馥, 山西愈佐子, 升本久子, 羽下早苗,
宮崎信次, 岡部ユキ, 清水公哉, 樋口菊時郎, 飯島玲子
（〆切後）

〔特〕 1名

清野裕

計30名

昭和62年度収支決算書

松高同窓会東京支部

自 昭和62年7月1日
至 昭和63年3月31日

収入之部		支出之部	
項目	金額	項目	金額
支部大会繰越金	130,712	会議費	77,565
支部会費	483,000	払込手数料	7710
寄付金	46,000	通信費	146,830
雑収入	177,000	印刷費	411,050
〃（その他）	18,760	事務用品費	3,845
		交通費	4,500
		雑費	53,600
		次期繰越金	150,372
合計	855,472	合計	855,472
次期繰越金	郵便貯金 133,322		
	現金 17,050	計	150,372

上記の通り報告いたします。

昭和63年4月15日

事務局 中村倉吉◎

会計 岡本和子◎

監査報告書

上記の収支報告書は監査の結果適正であると認めます。

監査 芳賀健一◎

“寄稿”

『赤山会』のこと

会長
亀 嶋 謙



会長 亀 嶋 謙

○設立と経過

悉しくは知らないが、東京には戦前から村松中学の同窓会があったらしい。しかしながら、もう古いことで知っている人として殆んどおられないだろう。

戦後も間もない昭和22年頃、早くも同窓会が結成されていた。この頃は旧制中学の第1回卒から第5回卒位までの方々が音頭をとられていた。佐藤次吉、塚野清治、式場隆三郎、蓮池公咲、片桐考一、平昌司、相田英三郎、高岡大輔、成田均らの各氏で実にそうそうたる人達であった。この古い大先輩達の活躍が一段落して会合が途絶え勝ちになったとき奮起して盛上げられた人達があった。昭和6年卒第16回生の齊藤一男、山村勲氏の両氏である。このお二人が中心になって前後の先輩、後輩に広く呼掛け「赤山会」という会を作った。

昭和40年頃のことである。赤山会とは母校の裏山に連なる赤山に因み命名された名である。初代の事実上の会長は齊藤一男氏で、続いて水尾正二氏、渡辺文男氏、川瀬五郎氏と続いた。その頃の懇親会は幹事長の山村勲氏が事務上の切盛りを一切引受られ年4回開催していた。会は毎回盛況で参会者も多かった。会の前後には全員が肩を組み旧校歌である「塵の巷」を合唱し大いに氣勢を上げる光景が屢々見られたものであった。

○大きな役割

この赤山会が母校に果たした役割で誇っても良いと思う功績は、新制高校卒の人達、それから旧村松高女卒の人達をも含めた——つまり旧制村松中卒の人達を含めると三様の卒業生を参加させた全く内容の新しい同窓会東京支部を作ったことであろう。名称は従来と同じ同窓会東京支部と呼んでも内容が全然違ってくるのである。

赤山会の人達は学制が違うとは言え、新制村松高校は自分達の分身であるという自覚の下に伝統ある同窓会を心を込めて永遠に残そうと勤めたのである。結成までかなり長い間、積み重ねの期間があった。夫々の母体の幹事の熱意で実らせたのである。この新しい東京支部の結成は母校の60周年、70周年の記念行事に於ける募金活動に著しく貢献したのである。現在の支部長は佐伯益一氏(昭17年卒第27回生)で同窓会強化のため実に精力的に働いてくれている。

○新しい赤山会の動き

赤山会の会員は全員同窓会東京支部の会員で、支部の会には多くの人が参加するし、母校への支援は惜しまないが、ここ数年来、赤山会だけの懇親会を年2回位開きたいという声が高まって来たのである。これは或る意味では一種の懐古気風であろう。旧制中学の卒業生の数は、もう先が見えている。旧制は昭和24年3月卒の第34回生で終わっている。最後の卒業生でも、もう満60才の還暦に近い年令になっている。この年代になって来ると人間は誰れしも懐古の情が湧いてくるのが自然であろう。

それは旧制中学には独特の雰囲気があった。それが懐かしいのである。一言で言えば「長幼序あり」の心とでも言うべきかと思う。教師と生徒、上級生と下級生、先輩と後輩の区別が厳としてあった。今の時代でも基底には、その風が残ってはいるが、程度は比較にならぬ程強烈なものであった。この一種の差別観が社会の全ての面に互って、ぴーんと一本筋のように貫いていたのである。そこには辛いこと、厭なことも多くあった。しかし弱音や不平を訴えても、学校も世間も殆んど採上げては呉れなかったのである。今の新制高校の人達には想像もでき

ないことだろうけれども、当時は「切磋琢磨」という標語の下、もう偏えに堪えさせられるのが極く当り前のことであった。若しかすると学科の勉強よりも、この精神高揚の方が優先しておったのかも知れない。

旧制中学はまた男子のみの5ヶ年課程であった。全校生でも600人位で、いまの高校の略1学年生ほどの人数に過ぎないが、5ヶ年間の長さに互って学校生活を共にした。行事も多かった軍事教練もあった。放課後の運動もまた強制的で何れかの部に所属しなければならなかった。自然と全校生が知り合う機会が多かったのである。正直言って、辛かったこともあったが、いまになって振り返ると懐しい思い出が多い。

赤山会として、もう一つ考えて置かなければならないことは、いまや圧倒的に新制高校卒業の人達であるということだ。その新制高校を初め頃に卒業した人達は、既に社会の重鎮として活躍している人達が多いのである。その意味で、そろそろ交替の時期に来ているのである。そそんな事情が背景にあった。そして昨年秋、永年会長を勤められていた川瀬五郎氏が80才の傘寿を迎えられるのを機に会長を辞任され、新らたに不肖、私が会長に

就任することになった。また総括幹事として佐久間精一(昭10年卒第20回生) 幹事に堀哲二(昭14年卒第24回生)と松尾貢(昭19年卒第29回生)が夫々に選任された。

東京在住の現赤山会員は大体80名程であるが、もう少し名簿を整理したり、東京近辺在住の人達を含めると150名位にはなりそうで、いまその拡充を目指している。とにかく終りを完うのできる立派な会にしたいと思っている。そして母校の益々の隆昌のため今後も充分な支援を続けてゆく所存であることを申上げて筆を措く次第である。

昭和63年3月末 記

○略 歴

大正9年2月 新発田市に生る

昭和12年3月 旧制村松中卒、早大卒、(株)三井銀行入行、昭和49年年定年退職後早大総長室入り、財務、百周年募金担当し昭和62年辞任

現在、早大商議員

(社)日本甲冑武具保存研究会常務理事(財務)

(財)三河郷友会理事、青梅ゴルフクラブ監事

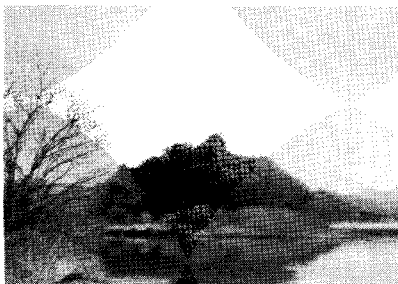


“ 寄稿 ”

思い出の麒麟山

作詞・作曲 伊藤勇五

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1. 橋の灯りが
甘い湯の香に
夢を結んだ
懐かしい麒麟山 | 夜霧に潤るむ
しっぽり濡れて
出で湯の宿よ
思い出の宿 |
| 2. 一目惚れです
云って恥じらう
逢えて嬉しい
懐かしい麒麟山 | 貴方の故と
湯上り化粧
出で湯の夜よ
思い出の夜 |
| 3. 君がお前と
忘れないわと
そっと泣いてた
懐かしい麒麟山 | 変った朝に
涙を堪え
出で湯の花よ
思い出の花 |
| 4. 旅の一夜の
未練残して
後ろ髪引く
懐かしい麒麟山 | 儚ない恋に
絡めた小指
出で湯の町よ
思い出の町 |



出で湯の花

作詞・作曲 伊藤勇五

- | | |
|--|---|
| 1. 越の湯の浦
涙かくして
貴方いのちと
なさけ一夜の
そっと心に | 出で湯の里に
生きる花
切なく燃えた
思い出を
抱き締めて |
| 2. 旅のお人と
別れ辛さに
名残り惜しんだ
溜めた涙を
幾度 貴方と | 承知で好いて
泣いた朝
城山橋に
捨てに来て
呼んだやら |
| 3. 阿賀のほとりに
湯の香ほんのり
川の瀬音に
今日も惚んで
運命かなしい | ネオンが揺れる
匂う宵
貴方の声を
姿見に
紅を刷く |
| 4. 眠れない夜を
酔えぬ窓辺に
旅を今ごろ
更けて吐息の
帰る当ない | お酒に酔る
きりん山
貴方は何処に
湯の里に
影を恋う |

(旧中第33回 昭和23年卒)
東蒲・鹿瀬町出身

“ 寄稿 ”

まぼろしの女学校に寄せて

“昔々村松にも女学校があったそうな”と、後の世の人達が話をするかも・・・と。

我々が青春を満喫して過した村松高女が、年月と共に風化してしまいそうなことになりそうです。たまたまピアノが残っていると云うことで、少しでも当時の資料を残しておいてはとの話があり、去年女学校の校友会誌

“花すみれ”を探してみました。幸い旧恩師（夫人が尾道市在住）のお宅に第18号がみつかり、又、同級生のお宅から第17号がみつかり、夢中でコピーをとってみました。かつての我々の学校生活が手にとるようにわかり、改めて感激を新に致しました。

我々の学生時代には既に日支事変が始まり、戦時色が濃厚になりつゝあり、学業の途中に村松駅まで、出征なさる方々をお見送りしたものでした。でも種々なことにめげずに、あの頃の人達は立派な文章でかなりの文才のありそうなもの許り、数十年経た今、果してこれだけの文章が書けるかな、と疑ってみたくになります。

人・夫々想い出は異っていても、母校がもう消え失せしていると云うことは誠に情ない淋しいことであり、今の内に何か残せるものはないかと、真剣に考えるようになりました。

設備が最低、生徒数が最低、しかし小さいながらも温い女学校でした。それに結構優秀な生徒さんが多いようにに思いました。かつての先生方ももう少なくなられ、女学校そのものの歴史をしょって下さった菅先生も既においでにならない。昨年帰郷の折、先生のお墓参りをして来ました。“無”と刻まれた墓石には、村松の歴史がそのまゝ感じられ、すべては“無”に帰するのか、と盡々時の流れを痛感して参りました。

残念ながら、ふっと気がついた時には、私が老後の域に達しておりました。我々が居なくなったら、それこそ永久に幻の女学校になってしまうように思われてなりません。でも卒業生の胸の中には、沢山の想い出がコンピューターに入力されたかのように残されているものと信

熊倉芳枝 旧高女19回（昭和16年3月）卒
信じます。

“柿食えば鐘がなるなり長養寺”と法隆寺をもじって宮先生をニヤリとさせた友達。（昔、長養寺で時の鐘をついていた）今から思うと何ともスタイルの悪いブルマーをはいて、バレーボールをやっていた私達、テニス部の人達こそ時代の先端に行くようにモダンに見えたこと、廊下で上級生にあい、きちんとおじをしなかったから睨まれたとか、作法の時間にしびれがきれて、靴下の穴をかくすのに一苦労したとか、何とも他愛のない想い出ばかり、今考えると何でもっとよく勉強に打ちこまなかったか、と反省の色のこい私でした。

でも人間とは不思議なもので、自分の育った環境を非常に美化して考えがちですが、空気よし、景色よし、白山・菅名岳等遠くに眺めて、思いきりのびのびと暮した時代と云うものは永久に自分の糧としてついて来ているらしく、今改めてその環境に感謝の気持を抱いています。

たまたま老後を過す環境が、空気よし、景色よし、雄大な大山（江戸時代に大山詣りをした山）と丹沢の山々の連なりを眺めながら、あたかも菅名連山をのぞむかのようなところに暮すことになりました。村松育ちの主人と二人で、のんびりとこの厚木の地で折々の会報を屹度楽しみに待つことになるでしょう。

旧高女の卒業生の皆様方、何か資料がございましたらお寄せ戴きたいと云うことと、ともすれば変わりゆく現世に、おいてゆかれそうになる自分達をみつめ直しながら、又、よい想い出だけを大切に、いやなことは捨て去って、明るい元気な、そして素適なお年寄りになりたいと云う願望を、何時までも持ちつゝけて行こうではありませんか。

どうぞお元気でお過ごし下さるよう祈ってます。



思い出の写真集

秘蔵写真をお貸し下さい



第8代校長、小野寺精一郎先生の御家族
(昭和9・3・31～全13, 3・31・在任4年)昭和14年4月、浦和市の自宅にて撮影。
(斉藤朝之氏提供)



里見法英先生の御一家、(昭和14年10月14日写) 左端の長女の方が旧中16回卒の小田恕哉氏夫人である。
(斉藤朝之氏提供)



旧村松高女，料理実習風景（割烹室にて）
昭和 15 年 12 月頃 （熊倉芳枝さん提供）



奈良先生夫人

小野寺校長
先生夫人

堀先生
夫人 岡島先生
夫人

松の木

能重宗匠

里見先生の
ご長女

岸本先生
夫人

里見先生
夫人

斎藤教諭の妻

野末先生夫人？

表千家^{のうぢい} 能重宗匠を囲んでの茶道愛好会の夫人たち
（昭和 11 年秋ごろ 村松町愛宕山登り口にて撮影）
（斎藤朝之氏提供）



昭和16年3月16日 旧高女第19回卒業生
有志の皆さん、卒業式後、母校を離れ難く、
(熊倉芳枝さん提供)

お便りの中から



前略、御無沙汰申し上げております。何時も大活躍の支部長さんに声援を送っております。ところで会報を楽しみにしておりますが、旧高女卒の1人として下手なものを投稿してみる気になりましたがどうでしょうか。

あまりにも旧高女が存在がかわれで、その中、消えて失くなるような卒業生ばかりですがそれこそ呆けないうちにと考えました。

笑われそうな文章ですが御判読下さい。

今年も同窓会にむけお忙しいことと存じます。どうぞ御健康に御留意の上、御活躍下さいますよう祈っております。(4月6日)

(二信)

今日、厚木の家より帰宅しましたら御丁寧な返書が届

旧高女19回卒 熊倉芳枝

いており恐縮しているところでございます。没になるかな、と思っていたところ採用して下さるとのことでやれやれと思っています。早速ですが、これが役に立つかどうか分かりませんが高校への資料に送ったときの焼増がまだありましたので同封します。

残念ながら昭和21年の村松の大火で多勢の方がアルバムを焼失されていて、友達にもかなり焼増をして差上げてありますが現代のようにカメラが自由ではありませんでしたのでその度に写真屋さんに出かけて行って写って貰ったように思いますがもう古ぼけたものばかりです。時代を写したような陸軍病院慰問のものとか、なぎなたとか授業風景も種々ありますが取敢ず、はっきりしたものと云うことで、では取急ぎ失礼申しあげます。

呉々もお身体お大事に、お互にいゝ年になりましたもののね。 この8月頃厚木へ引越す予定です。

(4月13日) 佐伯様

旧中第 16 回卒 小 田 恕 哉

前略、先日は珍しく地下鉄で支部長殿にお会い出来、一杯と思いましたが時間が無く残念でした。本日は斉藤氏よりの写真を会報にとのお話、愚妻が写っており遠慮したいのですが、恩師の御夫人が何人も写っておられますので何卒宜敷くお願い致します。

古い先輩は感慨無量のものがあると存じます。斉藤氏にもお礼の手紙を出しました。

貧者の一灯、2万円を同封しました。支部のお役に立てば幸甚です。 草々 （3月18日）

旧中第 28 回卒 齊 藤 朝 之

小野寺先生は、大阪外語大（外語専門学校）助教授から村松中学校長に着任され、あと旧制浦和高校教授になられたかと思いますが確信はありません（先輩で御存知の方がおられるかも知れません）

村松時代に英会話がペラペラでした。昭和10年か11年ごろ知人のアメリカでワッツさんという人が来て、校長宅で里見先生の長女の方が盛装して日本舞踊を披露、小生の母が三味線で長唄、汐くみか越後獅子を弾きました。それをワッツさんがハンド撮影機で撮影しました。小生はその時小学生でこれを見ましたが夢を見ているような、はなやかな光景でした。

又、小野寺先生は剣道を得意とされていましたが昭和14年頃、自宅にピアノがあるとは驚きです。一般の家庭にピアノが普及したのは、戦後の昭和34～35年ごろからです。小生その頃、月賦で買いました。現在はヤマハ、グランドピアノ（C-3）で職味として弾いていますがさっぱり上達しません。もう一年ほど弾いていません。戦史を書いていますので。

先号（第3号）に掲載された鈴木校長先生の御家族の

旧中第 26 回卒 福 原 平八郎

風花に頼ぬれ、慕情しきりなり

早春の日の村松

先輩達が残していった校舎に空虚と寂寥がみなぎり、校庭の残雪に陽光がきらめき、希望と愛情が交錯した臥竜の早春賦、星霜去りて40余年。あの叡智と栄光は何処に去りしや、白山にたなびく黄金色の雲、夏針の里の静寂、臥竜の松籟、あゝそはみな幻か。

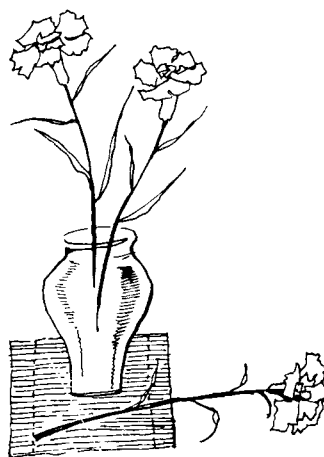
そんな事を思い浮べながらペンを執っております。過日は“松城”創刊号，“臥竜が丘は緑なり”新春号を御送付下され感謝致しております。仲々立派な印刷で内容も有意義なものでした。今後の御発展をお祈り致します。何の振込みも致しませんでした。が気持ちのみ同封致しました。御査収下さい。

又、若干ひまも出来ましたので村松時代の随筆でも書いてみたいと思っております。

写真で長女の方が皆川芳雄氏（海兵、戦死）の夫人であったとは驚きました。

昔の臥竜誌に同氏の兵学校から村松中学校生徒にあてた記事を読んだばかりでしたので。

今後ともよろしくお願い申し上げます。



蒲原鉄道の軌道（一）

旧中第22回 高地 覚

学校への汽車通学生にとって絶対、忘れられないものに蒲原鉄道の電車がある。

蒲原鉄道にまつわる思い出は数限りなく、ある筈だ。然しそれは蒲原鉄道が出来て、それを利用していた極く僅かの一時期にしかすぎない。ましてや建設当時のいきさつ、その歩み、等々については案外分っているようで分っていない。

この度中村倉吉氏を通じて村松在郷の同級生、高地覚氏にお願いして蒲原鉄道の歴史を執筆して頂くことになった。

題して “蒲原鉄道の軌道”

相当長編になると予想されるが連続掲載する。乞う御期待をと云う処である。

蒲原鉄道は大正11年新潟県下初の電気鉄道として発足。昭和60年3月31日、村松、加茂間17.7kmが廃止となり、現在は村松、五泉間4.2kmが運転されているだけである。
(佐 伯)

蒲原鉄道の軌道（一）

まえがき

高地 覚

私達大正っ子には、子供の頃見たり、乗ったりした電車への郷愁のようなものがある。

昨年の5月31日、旧松中第22回卒業生が麒麟山温泉に集合して、卒業50周年を祝う事となったが、正に50年振りの友が7名も居たのには驚いた。

某局の“それは秘密です”の番組の中で、小金次が泣かせる“ご対面”の感動のシーンを期待して「福泉」の玄関に出迎えたのであったが、「ヤア」「オウ」の唯の二言の対面でしかなく、頭と顔の区別が無くなってはいるが、面影が懐かしく、往時の学生時代が走馬灯のように浮んで来る。

蒲原鉄道村松駅頭での選手の応援、農協倉庫前に坐らされての説教の痛さ、電車通学の楽しさ等回想して、何

時迄も尽きない語り草となってしまった。

今般は、松高同窓会東京支部より同窓会員にとって、多かれ少なかれ懐かしい思い出と郷愁がある蒲原鉄道の歴史に就いて書いてくれとの依頼であった。

大変な光栄であるが拙文を恥じ躊躇したものゝ大きな変遷の中を、災害と斗いつゝ労使が一本のシャフトとなって、公共輸送の最後の砦として死守して来た先輩達の労苦を綴り度く引き受けた次第です。

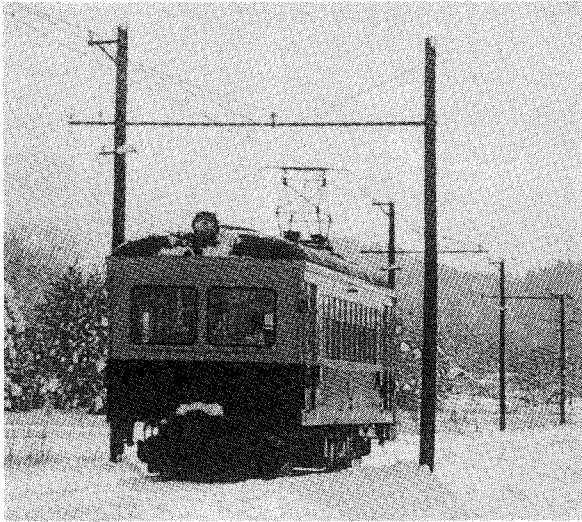
電気鉄道建設の

目論見書

先ず記録を捲ると最初に赤茶けた蒲原鉄道創立職意書が目に入ってくるが、先ずこれを以って時流

と役割り、使命を噛みしめて見る必要があろう。

「産業ノ発達ハ文明的交通機関ノ補助ヲ ツテ始メテ其ノ目的ヲ達スルヲ得ベシ、交通機関ノ施設宜シキヲ得ザランカ天賦ノ宝庫モ社会ノ利用に供スル能ハズ即チ産業ト交通機関トガ恰カモ双輪唇齒ノ関係ニアルハ茲ニ喋々ヲ要セズシテ風ニ世人ノ熟知スル所ナリ。新潟県村松町ハ中蒲原郡中都会（歩兵30聯隊所在）ニシテ人口稠密、商工業亦タ觀ルベキモノアリ、加フルニ其ノ附近ヨリ隣接、北・東蒲原2郡ハ本邦有数ノ鉄鉱所在地ニシテ其ノ他、金・銀・銅等ノ鉱区数多アリト雖モ、不幸ニシテ交通機関ノ設備ニ乏シキガ為メ此 此一大富源ヲ開発スル能ハズ有望ナル諸般ノ産業モ遅タトシテ進マズ現ニ政府ノ鉄鉱区ニシテ未ダ採掘ニ着手セザルが如キ蓋シ其ノ一班ヲ窺知スルヲ得ベシ地方ノ人士之ヲ遺憾トスルコト茲ニ久矣、今ヤ欧州ノ戦雲己ニ リテ新ニ世界的經濟戦ハ將ニ吾人ノ目捷ニ襲来セントス此ノ秋ニ当リ堅実ナル事業ヲ起シ外敵ニ抗シテ時運ノ進展ニ伴フベキ實力涵養ノ基礎ヲ建立スルハ刻下ノ最大急務ナリ、茲ニ於テ力余輩同志相謀リテ此目的ノ一端ニ応ゼンガ為メ蒲原鉄道ヲ敷設シ以テ地方ノ産業ヲ啓發シ延テ国富増進ノ一助トナサント欲ス、 抑モ本鉄道ハ院線五泉駅ヲ起点トシテ県下



(西村松一寺田間を走る蒲鉄電車)

ニ於ケル鉾山地域ノ咽喉トモ称スベキ中蒲原郡川内村ニ至ル間ヲ第1期線トシ、第2期線トシテ村松・加茂間ヲ敷設シ院線ニ対スル三角形ノ一辺ヲ形成シテ以ツテ直江津方面トノ捷徑ヲ開設シ依テ以テ各地間ノ交通ヲ敏活ナラシメントス

起業ノ順序ハ先ツ最モ有利ナル第1期線ヲ速成シ、事業稍々其ノ緒ニ就クラ以テ第2期線ニ着手スル予定ナリ殊ニ本鉄道ノ誇リトスベキハ日本電気製鉄株式会社ノ経営ニ係ル白滝鉾山ノ鉾石運搬特約ニシテ己ニ採鉾地ヨリ川内村ニ至ル間8哩鉄索建設シ現ニ毎日40トン内外ノ鉾石ヲ搬出シツヽアリ本鉄道第1期線開通ノ曉ニ至ラバ其ノ出鉾量愈々増加スルノミナラズ政府ノ鉄鉾亦タ本鉄道ヲ利用スルニ至ルハ必然ノ情勢ナリ、果シテ然ルトキハ本鉄道ハ愈々有望トナリ他ノ一般客貨ト共ニ輸送ノ繁盛ヲ觀ルコト期シテ待ツベキナリ、庶幾ハ大方ノ諸彦県下産業開発ノ為メ奮テ本事業ニ賛成セラレンコトヲ切望ニ堪エズ

因ニ本鉄道ハ己ニ1月29日付、監第2339号ヲ以テ内閣総理大臣ヨリ免許状ヲ下附セナレタルモノニシテ勿論、地方鉄道補助法ニ依リ年5分迄ノ補償ヲ得ラルル特典アリ

発 起 人

鉄道は寺沢、赤錆、木越、大畑、若宮の両側田圃中を通り、本田屋から石曾根本村に入り、営所通りより公園西側、中学校地藏山下、深沢、夏針手前仙見谷停車場に入る5哩50の鉄道で村松停車場を営所通りに置くとし、

兵営、中学校には近かったので、大部様相を変えたものになったであろう。

鉄道の種類は、単線電気鉄道で、県内最初の営業用電気鉄道であり、軌間を3呎60吋(1,067mm)とし、原動力は水力電気で、直流2線式600V架空単線であった。

資本金を50万円とし、総収入は81,535円(1日1哩平均40円60銭)とし、内訳を見ると旅客収入は58,035円、1日平均の乗車人員は五泉、村松間800人、(乗車賃18銭)、村松、仙見谷は100人(乗車賃15銭)であり、貨物収入は21,900円、内訳は普通貨物9,490円、村松・五泉間40屯(1トン45銭)、村松・仙見谷間20屯(1トン40銭)、白滝鉾山鉄鉾石12,410円1日平均40屯(1トン85銭)、雑収入1,600円となっている。

営業費は33,325円で(1日1哩平均6円60銭)、利益金は48,210円とし、配当金年8分を望めるもので、営業期間を満50ケ年とするものであった。

株式の1株は50円で、総株式数は10,000株で決算は年2回で毎年6月、12月に定期総会を開催するもので、現在の物資と人の乗降を勘案すれば、十分に収支の見通しは立つものであった。(つづく)

〔 筆 者 紹 介 〕

昭和12年、旧中第22回

全22年12月2日、復員 12月15日蒲原鉄道入社、41年5月1日、総務部長 兼企画室長、44年5月取締役、49年2月、常務取締役、61年5月30日、非常勤取締役

釘貫紋の由来と堀直政

佐藤 久

越後 村松藩は 村上藩（10万石）の分家である。村上藩・堀家は初代の堀 直奇を継承した堀 千助 直定の夭折によって寛永19年（1642）にあえなく断絶した。

堀家の先祖は清和源氏・斯波氏の一族 斯波源三郎氏種が尾張国中島郡奥田に居住し、その郷名「奥田」を氏として名乗ったものである。（現在・愛知県 稲沢市奥田）それより数代後の奥田右衛門秀種は、美濃の豪族・土岐氏に従属していたが、たまたま近江の佐々木氏との合戦には大いに武勇を振るい、佐々木家の定紋「四つ目結い」の旗指物を奪取して紋章四つ目の一個を取って「釘貫」クギヌキと称し従来の奥田家本紋「亀甲に花菱」に加えて家紋の一つとした。

この奥田姓を堀姓に替えたのは年代は明らかでないが、堀監物直政の時である。この直政は少年時代弟の堀久太郎秀政（信長・秀吉に仕えて 名人久太郎と称された傑物）と共に叔父の毛坊主蓮性寺（この末裔は富山市に現住）に養育された際、蓮性寺は若い二人の甥に「何れか先に軍功を挙げた者が主権を握ること」を互いに約束させて競わせたが秀政がその榮譽を担い、以後 直政は与力としてつかえていた、その頃、直政は住居を尾張の奥田から美濃の西部＜アカナベ＞（現・岐阜市西部）に移していた。

天正10年6月（1582）本能寺の変で信長を討った明智光秀が山崎に拠った折、増援に急遽駆け付ける途次の明智左馬助光春は此の堀直政の軍勢に行く手を阻まれ、やむなく湖水を渡って漸く坂本城に入ったが此の史実は（左馬助の湖水わたり）として残り文中に強敵「堀」の名が明確に記録されている。

堀 秀政は天正18年5月（1590年）小田原に於て陣没したが豊臣秀吉の要衝・北の庄（現一福井市）に居を構え「北の庄侍従」と称されていた。

直政は 秀政の遺児一秀治をたすけ執権として取り仕切り、慶長3年（1598）上杉氏の会津移封に伴い北の庄より越後入りをし福島城（現・上越市直江津）に駐在した。尚 彼の一門一堀 直清は三条城を、堀 直奇は坂戸城（現・南魚沼郡六日町）を与えられ、堀直里は無役、一万石を与えられていた。

堀 直政は又、「天下の三陪臣」の一人として高く評価された。即ち毛利輝元に小早川隆景、上杉景勝に直江兼続（カネツグ）そして 堀秀治に堀 直政の3名である。

あとがき

3回にわたり掲載した“村松史跡探訪”は今回をもって一応終らせていただきます。長い間の御愛読ありがとうございました。

筆者の佐藤 久氏に厚く御礼申し上げます。

コトブキドライセンター

株式会社 寿

社員募集

工場、営業所の管理

男、女 不問

年齢 25才～40才位

委細は面談の上

〒108 東京都港区高輪2-1-24

TEL 03 (445) 6501-2

永幸産業株式会社

代表取締役 伊藤 勇 五

（昭和23年旧中93回卒 鹿瀬町）

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-16-8

TEL (03) 770-3291

新潟県下に県立高校が何校あるかご存知ですか 何と100校もあります。 100も!!

(昭和 61 年度現在)

冠に新潟県立をつけ、下に高等学校をつけて読んで下さい。

1 新 潟 (新潟市関 屋)	37 新 津 南 (小須戸)	73 柏 崎 (柏崎市)
2 新 潟 中 央 (" 学校町)	38 白 根 (白根市)	74 柏 崎 常 盤 (")
3 新 潟 南 (" 上所島)	39 五 泉 (五泉市)	75 柏 崎 農 業 (")
4 新 潟 江 南 (" 女 池)	40 村 松 (村松町)	76 柏 崎 工 業 (")
5 新 潟 西 (" 内 野)	41 津 川 (津川町)	77 柏 崎 商 業 (")
6 新 潟 東 (" 小金町)	42 長 岡 (長岡市)	78 西 越 (出雲崎市)
7 新 潟 北 (" 本 所)	43 長岡大手 (")	79 高 田 (上越市)
8 新 潟 船 江 (" 白山浦)	44 長 岡 西 (")	80 高田北城 (")
9 新 潟 工 業 (" 小 新)	45 長岡農業 (")	81 高田南城 (")
10 新 潟 東 工 業 (" 竹 尾)	46 長岡工業 (")	82 高田農業 (")
11 新 潟 商 業 (" 白山浦)	47 長岡商業 (")	83 高田工業 (")
12 新 潟 向 陽 (亀田町)	48 長岡向陵 (")	84 高田商業 (")
13 黒 崎 (黒 崎)	49 見 付 (見付市)	85 新 井 (新井市)
14 巻 (巻 町)	50 与 板 (与板市)	86 直 江 津 (上越市)
15 巻 農 業 (")	51 栃 尾 (栃尾市)	87 直江津工業 (")
16 興 農 館 (")	52 三 条 (三条市)	88 柿 崎 (柿崎町)
17 巻 工 業 (")	53 三 条 東 (")	89 有 恒 (板倉町)
18 西川竹園 (西川町)	54 三条工業 (")	90 吉 川 (吉川町)
19 吉田商業 (吉田町)	55 三条商業 (")	91 安 塚 (安塚町)
20 分 水 (分水町)	56 燕 (燕 市)	92 糸 魚 川 (糸魚川市)
21 新 発 田 (新発田市)	57 燕 工 業 (")	93 糸魚川商工 (")
22 西新発田 (")	58 加 茂 (加茂市)	94 能生水産 (能生町)
23 新発田農業 (")	59 加茂農林 (")	95 佐 渡 (佐渡佐和田町)
24 新 発 田 南 (")	60 小 千 谷 (小千谷市)	96 羽 茂 (" 羽 茂 町)
25 新発田商業 (")	61 小千谷西 (")	97 佐渡女子 (" 金井町)
26 村 上 (村上市)	62 堀 之 内 (堀之内町)	98 両 津 (" 両 津 市)
27 村上桜ヶ丘 (")	63 小 出 (小出町)	99 相 川 (" 相 川 町)
28 村上女子 (")	64 六 日 町 (六日町)	100 佐土農業 (" 畑 野 町)
29 中条工業 (荒川町)	65 六日町女子 (")	
30 荒 川 (")	66 塩 沢 商 工 (塩沢町)	
31 中 条 (")	67 湯 沢 (湯沢町)	
32 水 原 (水原町)	68 十 日 町 (十日町市)	
33 安 田 (安田町)	69 十日町実業 (")	
34 豊 栄 (豊栄市)	70 川 西 (川西町)	
35 新 津 (新津市)	71 津 南 (津南町)	
36 新 津 工 業 (")	72 松 代 (松代町)	

(公立高等学校)

- 1 新潟市立 沼垂
- 2 " 高志
- 3 " 明鏡

あとは私立

消 息

○ お亡くなりになりました。

旧中13回 齊藤隣之助 昭和62年6月
高3回 小黒 勉 昭和62年11月

○ 住所が変りました。

旧女25回 原 ヤス子
〒350-13 埼玉県狭山市富士見町1-29-3へ

高 奥津 嘉雄
〒273 船橋市東中山2-11-29-1102へ
TEL 0473-36-0347

高4回 加藤 清治
〒532 大阪市淀川区東三国2-19-10へ
東三国第一マンション405

旧中30回 岩見 益教
〒166 東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-24-19
TEL 220-5410 へ

○ 加わりました。

高16回 中村 俊枝
〒104 東京都中央区勝どき3-2-13-408

高 北出 昭夫
〒134 東京都江戸川区春江町3-14-261
TEL 677-9571

高22回 小沢 幸子
〒160 東京都新宿区坂町4-6
TEL 357-1985

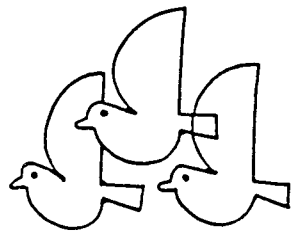
校 歌

旧県立村松中学校校歌

旧村松高等女学校校歌

新 校 歌

1. 塵の巷を遠ざけて
雲たち迷う白山の
麓に立てる松の群
見よ凌霄の気を含む
2. 緑色濃き木陰には
夏も尽せぬ泉あり
湧きて流れて末遂に
汪洋として海に入る
3. 落葉をくぐる流れにも
岩石砕く力あり
清きは水の姿にて
強きは誰が心ぞや
4. 万緑の気地に潜み
風雪野山に荒る時
色さえ変えぬ常磐木の
強きは誰が操ぞや
5. 八億垂細垂の民率い
行手遥けき文明の
海原遠く漕ぎ出でん
これぞ吾等がつとめなる
6. それ英雄も人傑も
人の子吾等がたぐいなり
嗚呼松城の健男児
勇みて立つべし諸共に



1. 愛宕の山のむら松の
常緑色の常磐なる
操を胸に日の本の
をみな徳を磨かばや
 2. 心は身はも真夏なほ
日に輝ける白山の
雲にもまさる清さもて
正しき道を進まばや
 3. 其の名も高きこの里の
桜の花のうらうらと
のぼる朝日に匂うごと
気高き姿保たばや
 4. 世界に比なくうるわしき
皇国の民と生れきし
幸をおもひていざやいざ
手を取り共に励まばや
- 相馬御風 作詞
中山晋平 作曲
1. 普く照らす天つ日の
光を浴びて年々に
伸びてしまめ若松の
ときわの志操いや堅き
学徒われらの在るところ
明朗の和気みなぎれり
 2. 見よ質実に清純に
進取の生気湧き溢れ
文明の花の咲くところ
希望は常に輝ける
道に我ら 進ましむ
努めなんいざもろともに

応援歌

応援歌 (1)

1. 緑濃き臥龍ヶ丘に
轟くは我等が歓呼
若人の高なる血潮
たたえつつ春の日めぐる
2. いざ叫べ若人の誇り
わななける力の腕
見よや君歓喜の胸に
輝くは永久の勝利

応援歌 (2)

1. 臥龍原頭幾星霜
切嗟琢磨の功を経て
からくれないの香に匂う
誉れは高き松城の
健児が胸に血やおどる
2. 我等がえらぶますらおの
誉れは海の湧くがごと
望みは雲のゆくがごと
月の桂をなゆずりそ
栄えある名をぞとこしえに

応援歌 (3)

1. 松城健児六百が
祖国の為に剛健の
大図をここに定めんと
送りいぞせし我が勇士
覇権をゆずることなかれ
我等六百ここにあり
2. 臥龍原頭精気あり
義憤に満ちし大丈夫が
驕奢の潮せきとめて
逸惰の眠り打ち破り
高うつ胸の雄叫びに
進めとなるを如何にせん
3. 今壮快の晴れ戦
見よ雄叫びの只中に
我等が望み一筋に
肩にぞかかる勇戦士
覇権をゆずることなかれ
我等六百ここにあり



昭和63年6月 第4号

編集・発行人：新潟県立村松高等学校同窓会東京支部

佐伯 益一

事務局 〒108 東京都港区高輪2-1-24

(株) 寿内

TEL 03-445-6501

郵便振替 東京 2-136445